ツボを押さえて読むほどハマる!

はだし文化新聞

ふむふむ

No.14 2022 1|10

2022年1月10日発行 通巻 第14号
発行／NPO法人日本ビーチ文化振興協会
編集人／逆松雅美
〒104-0033 東京都中央区新川1-1-7 リバーサイド茅場町3階
電話 03-3552-1171

編集スタッフ／吉田亜衣（BeachvolleyballStyle）
デザイン／島内泰弘デザイン室

創立20周年記念号 INDEX

1面 ・創立20周年特別てい談【前編】：大村哲夫×佐伯美香×浦田聖子 海辺文化の改革を振り返る
2-3面 ・はだしのあゆみ PART II
4面 ・創立20周年特別てい談【後編】ビーチは誰もが夢を抱き、輝ける場所
・朝日健太郎氏が振り返るビーチ文化
・連載：Adviser's Column
・編集後記：はだしの足跡

創立20周年特別てい談【前編】

海辺文化の改革を振り返る

2022年をもって創立20年を迎えるNPO法人日本ビーチ文化振興協会。20年という節目を記念して日本ビーチ文化振興協会の創立に関わってきた当協会の会長・大村氏と、発足当初からビーチスポーツの伝道師として活動してきた佐伯、浦田両理事が海辺の移り変わりについて振り返り、日本の未来のビーチ像を語った。

撮影協力／杉並区永福体育館（東京都杉並区） Photo/Kazuaki Matsunaga

大村 各地に伝わる「羽衣伝説」や沖縄の「ニライカナイ」のように、古来の海は信仰の対象で神に祈りを捧げる場所でした。海水浴が始まったのは明治時代と言われ、温泉に行けない人は海につかって治療しようという発想から生まれました。

佐伯 かつての海辺の概念は「活用するもの」ではなかったわけですね。

大村 はい。私が国土交通省の港湾局にいた頃も、海辺は「守るもの」という認識がありました。ところがおよそ20年前。元理事長であり副会長の瀬戸山（正二）さんから「世界のビーチと日本のビーチのあり方」についてお話をお聞きしました。衝撃を受けましたね。「海辺でスポーツができる環境を作りましょう。それには海辺の砂浜の幅を広く、平らにしてください」と。熱心に理念を語る瀬戸山さんに感銘を受けて港湾局内に「新たな海辺の文化の創造研究会」が発足し、2003年に初めてお台場で「第1回ビーチスポーツin ODAIBA」を開催しました。

浦田 転向当初、選手として出場しました。あのイメージが都心のビーチのイメージを変えたんですね。

大村 はい。当初は「ケガしたらどうするんですか?」など反対の声もありましたが、我々の理念は揺ぎませんでした。海辺の利活用に向けて第一歩を踏み出しました。のちにはスポーツだけではなく、本を読んだりアート展をしたり、海辺をカルチャーで利用するという理念も加わったことで「新たな海辺の文化の創造研究会」は、2004年「日本ビーチ文化振興協会」として設立に至りました。

佐伯 発足のときからご一緒させていただいていますが、まさに海辺文化の「改革」だったと思います。

大村 イベントを開催してもそれを広めてくれる人がいなければ、発展していきません。当時、佐伯さんと浦田さんはスター選手でしたから、人を呼ぶことができた。伝道師としての功績は大きいですよ。

佐伯 これまでの活動で大村会長が印象的だったことはありますか?

大村 世界で初めてビーチスポーツの祭典となった「アジアビーチゲームズ」が2008年にインドネシアのバリ島で開催され、視察にいきました。島の一カ所で開催されているわけではなく、島全体に競技会場が点在していてそれまで見たことのないビーチカバディ、ビーチセパタクロー、ビーチレスリングなどのビーチスポーツが行われていました。それ以降、「アジアビーチゲームズ」をずっと視察してきましたが、砂浜を使わない競技でもビーチサイドで開催すれば、それもビーチスポーツに含まれるという新たな発見もありました。3×3やスポーツクライミングなどがそうです。ビーチスポーツの多様性と可能性を大いに感じました。

佐伯 ビーチスポーツの種類もどんどん加わって、ビーチスポーツ人口は確実に増えていると思います。とくにビーチテニスは松山でもそうですが、出張先の海で大会開催や練習しているのをよく見かけます。

浦田 日本でも2018年から「ジャパンビーチゲームズフェスティバル」が開催されてきて昨年千葉で行われたイベントに親子で初めて参加しました。スラックラインをはじめ体験できるイベントがたくさんあって、うちの子どもは父親（庄司憲右。ビーチバレー選手として出場）の決勝戦以外は応援そっちのけで身体を動かしていました（笑）。ビーチクリーンもお友達と楽しみながらできました。楽しみながらできるとゴミ拾いの概念も変わりますよね。

佐伯 ゴミといえば、先日松山でビーチバレーボールのツアーが開催されて、10年以上ぶりに北条市風早長浜海岸の会場を使うことになりました。コート整備をしていたらキャンプ用のテントの杭やバーベキューの炭、フライパンが砂の底から出てきました。そのとき思ったのは、スポーツやイベントを定期的に海で行っていくことで、より安全なビーチへと整備されていくのだと感じました。

大村 20年前、ビーチの活用について瀬戸山さんが語っていたような時代がいまここに訪れたわけですね。

［4面の後編に続く］

創立20周年特別てい談【後編】

ビーチは誰もが夢を抱き、輝ける場所

大村 今回の東京五輪で盛り上がりを見せたスケートボードは、2年前に開催されたワールドビーチゲームズの競技としても盛り上がりました。東京五輪で使用した有明アーバンスポーツパークはそのまま残すそうです。我々日本ビーチ文化振興協会としても、次の30周年に向けてアジアビーチゲームズを日本に招致してビーチスポーツの存在を広めていきたいですね。

浦田 東京五輪は残念ながら無観客になってしまいました。けれども開催できたことはプラスと捉えて東京五輪のレガシーを受け継ぎ、コロナが落ちついたら有観客で盛り上がっていけたらいいな、と思っています。

佐伯 ビーチゲームズの競技は外で行われますしコロナ対策も万全に行って、生で観戦したいです。

大村 ビーチペタングではご高齢の方が日の丸をつけて出場していました。その誇らしげな姿を拝見したときに私自身もビーチウッドボールの代表を目指して出場したいという気持ちが芽生えました。プレーヤーとして楽しめたら最高ですね（笑）。

一同 ぜひ！ 実現させてください！

浦田 ビーチスポーツの概念は、スポーツは若くないとできない、体力がないともたないというイメージを覆すきっかけになりますね。

大村 日の丸をつけて取り組むのはやっぱり違いますから。

佐伯 夢を内に秘めていた人たちがたくさん出てきそうですね。

浦田 親世代もがんばるから子どももがんばる。子どもに「がんばれ！」と言うだけではなく、がんばっている姿を親自身が子どもに見せる。素敵な関係を築けますね！

大村 ビーチでは、お子さんもシニアも夢が持てる。いろいろなことを誰もが楽しめる。いいことずくめです。次の5年、10年に向けて日本のビーチの未来を作っていきましょう。

朝日健太郎前理事長が振り返る

ビーチ文化20年

ギャップを埋めてきた20年。海洋環境を守る新たなフェーズへ

これまでの20年間を振り返ってみると、海辺のスポーツや文化を広めていこうと始まった活動は幅が広がり、定義や価値観が造成されてきました。ビーチスポーツおよびビーチアクティビティの増加、ビーチカルチャーの多様化、波打ち際だけではない里山や森林とつながりのあるビーチ空間づくりなど、「砂」と「社会」の共生を築いてきた20年間だと思います。

日本はご周知の通り、海岸線に囲まれた島国です。人々にとって「水」「緑」「砂」の3要素は、身近にあり過ぎた資源でした。一方、欧米の内陸の地域にとって「砂」は貴重な資源。人々はビーチにこぞって集まり、そこでスポーツやカルチャーが発展していきました。そういう意味では、日本と世界の出発点は違いました。そのことにいち早く気づいた瀬戸山副会長（元理事長）は、日本の未来を危惧し当協会を立ち上げました。海辺の利活用を唱え、青少年の育成やビーチスポーツの普及活動を積み重ねてきたことによって、日本と世界のビーチの ギャップを埋めてこられたと自負しています。

ビーチクリーンが地球を救う

次なる20年は新たなフェーズとして、海洋環境と人間の共存を軸において活動していきます。近年、「気候変動」による台風や暴風雨による水害の影響は、皆さんも痛感されていると思います。その大きな要因は海面温度の上昇。この動きを食い止めるために温暖化ガスの抑制などあらゆる取り組みが行われていますが、地球面積の7割が海である以上、世界中の人々の命題として外せない時代になってくるでしょう。

我々の活動の中でカギを握るのが、これまでコツコツと取り組んできたビーチクリーンです。ある研究結果から、ビーチクリーンは人間の心理において環境に配慮する行動へつながることが証明されています。「海をきれいにする」という行動は、実生活でも無意識に「脱二酸化炭素」や「省エネ」に配慮するようになるという好循環が生まれるそうです。

シンプルに考えてみましょう。ビーチに落ちているゴミを皆で汗をかきながら拾った後、環境を汚すような行動はしませんよね。つまり、地球に優しくなれるのです。小さな動きかもしれませんが、ビーチクリーンは海洋環境と相性はいい。そこで、私たちの暮らしを「エコライフ」へと転換させる活動を担っていきたい。「SDGs」のような、価値観を提供する言葉やロジックを考え、誰もが楽しめるビーチエコライフを掲げて歩んでいきたいと思います。

編集後記 はだしの足跡

遊佐雅美

東京2020オリンピックで感動と勇気をもらった2021年。当協会もいよいよ2022年で20年の節目を迎えることになります。近年では、海辺の利用も多様化になり、時代の変化とともに変わりゆくものもあります。そんな中でも、当協会が発足当時から掲げている「海辺に1年を通じて人が集えるように」という指針は全国各地に広がり、そのつながりはより強く増してきたと実感しております。今後も海辺の活性化を目指し、SDGsにも力を入れて取り組んでいく所存です。2022年も海辺にたくさんの笑顔が溢れるように活動し足跡を残して参ります。各地のビーチでお会いできるのを心より楽しみにしています。

Advisor's Column 第2回

開拓 小笠原島之碑の謎

十数年前、2回ほど小笠原の父島、母島に行ったことがある。船で24時間以上かかったが、天候がよければ大海原を航海するのは気持ちがよい。無論天候が悪いと揺れは最悪だ。

小笠原の父島には「開拓小笠原島之碑」という石碑が建っている。台座等を含めると360㎝を超える大きな碑である。作られたのは明治10年、小笠原に連ばれ建立されたのは同13年である。

小笠原は、1593年に小笠原貞頼が発見したとされている。1861年になり徳川幕府は「小笠原島新治の碑」を建てたが、諸外国の船舶が自由に小笠原に寄港するという状況が続き、外国による領有化の動きなどもあった。そこで明治政府は新たに「開拓小笠原島之碑」を建て、日本の領土であることを対外的にも明確にした。碑の撰文は大久保利通、書は太政官大書記官の日下部鳴鶴である。

この碑には、小笠原見から明治に至るまでの経緯などが記されているのだが、本文中2文字が削られている。碑の後半に「我が邦の地…此に至りて盡く。乃ち我が南門なり」とあるのだが、最後の「至於此而盡」の「而盡」が削られている。東京都教育委員会の案内板によると、御用取扱の小花作助が、「此に至りて盡く」と書くと、小笠原が日本領土の南限となり、南方へ進出する可能性を否定できると考え、除幕式の前夜、密かに削ったと伝えられているそうである。建立が大久保の暗殺（明治11年）後だったから削ることができたと言う人もいる。

しかし国際的にも重要な意味を持つこの碑は、政府の見解として書かれたものであり、それを現地事務所長が勝手に削ることができるものだろうか? 拓本の中には、削られる前のものもあり、いつ削られたかははっきりしない。意図的に削られたのか、いたずらなのか謎である。現在の小笠原はのどかで平和な島々だが、まかり間違えば、外国との領有権争いの舞台になり、あるいは悲惨な戦場となる可能性のあった地でもある。小笠原に行く際は是非その歴史も眺めてもらいたい。

山野岳義
TAKEYOSHI YAMANO
NPO法人日本ビーチ文化振興協会 顧問
財団法人全国市町村振興協会 顧問

みなと総研
一般財団法人 日本マリーナビーチ協会 JAPAN MARINA & BEACH ASSOCIATION
夢から感動へ―ハートテクノロジー 東洋建設
東亜建設工業 TOA CORPORATION
※順不同

HADASHI BUNKA SHIMBUN

20th Anniversary はだしのあゆみ PART2

この20年間、私たちが日本のビーチをしっかり踏みしめて作られたはだしの足跡は、しっかり残されている。
PART2では、2013年より朝日健太郎が理事長となり、
「ビーチゲームズ招致」実現に向けたプロジェクトの発信、新たなフェーズに突入した現在までを振り返る。

2021 2020 新たなフェーズへ

竹の伐採、加工から設置まで行った

東京湾の再生をめざし竹ひび1人1本設置しよう！

2021年9月5日
葛西臨海公園西なぎさ（東京都江戸川区）

海水を浄化させる効果がある「竹ひび」をビーチアスリートらと設置。「ふるさと東京を考える実行委員会」とともに次世代の子どもたちが安心して泳げる海を目指し、「ブルービーチプロジェクト」の一環として行った。

新理事長に就任した遊佐氏

遊佐雅美が新理事長に就任

2019年4月

ライフセーバーとして水辺の事故防止に努めてきた遊佐雅美氏が理事長に就任。『安心・安全な海岸』を掲げ「水辺の安全教室」を展開。自他を守る方法を体験から学び、事故防止に役立ててもらえるよう誰もが気軽に海へ訪れやすい仕組みづくりを目指し活動をスタートさせた。

AEDの講習を受ける参加者たち

遊佐雅美のウォーターセーフティーサロン

2019年12月3日
セルリアンタワー東急ホテル（東京都渋谷区）

海や川やプール、浴室などの生活圏内での水難事故は誰もが起こり得ると想定し、水辺の特性を知り、学ぶためのサロンを開催。水辺にはどのような危険があるのか理解したうえで、自然にふれあうことが未然の事故防止につながる。※現在も継続中

盛り上がりを見せたビーチテニスのナイトゲーム

第1回ANOCワールドビーチゲームズカタール大会を視察

2019年10月11日～16日（カタール・ドーハ）

国内オリンピック委員会連合が主催する国際的な総合ビーチ・マリンスポーツ大会が世界で初めて開催された。97ヵ国から1237人のアスリートが集まった。ビーチテニスやアクアスロンなど五輪とは違う種目が採用された。ワールドビーチゲームズの独自性が色濃くなり、選手、観客、メディアに新たな驚きと興奮をもたらした。※現在も継続中

2019

青森、岩手、宮城の3ヵ所での開催を計画した

みちのく潮風トレイルメッセージアート展

2020年9月～10月
（青森県八戸市・岩手県釜代村・宮城県気仙沼市）

東日本大震災の復興により4県28市町村をつなぐ「みちのく潮風トレイル」が開通。地域と自然のふれあいを啓発するためにメッセージアート展を東北で開催した。自然保護や復興をテーマに作品を一般公募しトレイル地域の海辺に展示しグランプリを決定した。※現在も継続中

子どもたちの笑顔がかわさきの浜ではじけた

東扇島東公園開園10周年記念イベント

ビーチライフin東扇島『ちびっこはだし運動会』

2018年10月6日
東扇島東公園かわさきの浜（神奈川県川崎市）

10周年を迎えた東扇島東公園の景観の素晴らしさと、災害発生時の首都圏防災センターとして機能する貴重な浜を地元の子どもたちに知ってもらうために記念イベントを開催。かわさきの浜が心のオアシスとなり、自慢のビーチとして活用されるように、という願いから開催された。

いなげの浜で全12イベントが開催された

ジャパンビーチゲームズ® フェスティバル千葉2020

2020年9月19日～20日
稲毛海浜公園いなげの浜（千葉県千葉市）

「都市型ビーチ」の整備を目指す千葉市が、ビーチスポーツの公式戦観戦・体験ができるイベントを開催。『千葉市をビーチスポーツのメッカに！』を掲げ、このイベントを契機に継続的に市民がビーチを訪れ、地域振興のための新たなプラットフォームの創造に着手した。※現在も継続中

プロジェクトオリジナルバッグをイベントで配布

海辺を守ろう！創ろう！育てよう！ブルービーチプロジェクト

2020年

2008年からスタートした「海辺を守ろう！運動」が「ブルービーチプロジェクト」へと名称を変更。「島国・日本の大切な海辺、通年集える環境を創ろう！」をコンセプトにCO²の削減、海洋汚染、プラスチックゴミ問題、水辺の正しい知識や命の大切さの指導に取り組んでいる。

ビーチウッドボールを多くの人に広めた

ビーチウッドボール体験 in かわさきの浜

2018年4月14日
東扇島東公園かわさきの浜（神奈川県川崎市）

川崎市唯一の海辺で、ビーチや海の関係者である一般人を対象とした『ビーチウッドボール』体験を開催。かわさきの浜を含む海辺の活性化が狙い。アジアビーチゲームズでも正式種目として採用された『ビーチウッドボール』は、年配の方をはじめ、幅広い年代層が海辺で運動ができるのが利点。

2018

海岸のリニューアルと併せ新たなビーチ活用を発信

須磨ビーチフェスタ

2017年5月28日
須磨海岸（兵庫県神戸市）

須磨海岸のリニューアルと併せ、豊かな自然、地域資源の存在とともに新たな海岸の魅力を発信。老若男女がはだしで健康ハッピーライフを体感し、四季を通じて神戸市内外の来場者に海岸を利用してもらうきっかけづくりを行うために開催された。※現在も継続中

ビーチ落語など新たなカルチャーを発信した

Beach Day in ODAIBA

2017年7月31日
お台場海浜公園おだいばビーチ（東京都港区）

創立15年目の節目として、新たに制定された「ビーチの日」に全国へ海の恩恵、海辺の価値感を発信。そして21世紀のビーチ文化の創造を育むことを目的に啓発事業として実施された。

日本記念日協会から「ビーチの日」として認定を受けた

「7/31ビーチの日」制定

ビーチ文化の創造を啓発するため、海の日と山の日の中間日である7月31日の語呂に合わせ「波のいい日」とし、一般社団法人日本記念日協会に「ビーチの日」として申請。正式に記念日として認定された。

多くのビーチスポーツの魅力を発信した。
写真はビーチサンボ

ジャパンビーチゲームズ® フェスティバル

2017年5月3日～5月7日
お台場海浜公園おだいばビーチ（東京都港区）

「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」を具体的な活動とするため、2017年より「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト／ジャパンビーチゲームズフェスティバル」と称し啓発イベントを開催。ビーチ・マリンスポーツの魅力を発信し、競技団体とのネットワークを強化してきた。※現在も継続中

2017

京丹後自慢のロングビーチで笑顔の花が咲いた

サンセットビーチラン in京丹後

2014年6月28日
夕日ヶ浦海岸（京都府京丹後市）

景観、ロングビーチ、砂質という3大メリットを持つ京丹後市の浜詰・久美浜エリア。『海の京都・京丹後市』を全国に広げるため、計画された。観光誘致を促進するため、ロングビーチを活かして、ビーチマラソン大会を開催。ビーチブランド創りを展開していった。（2014年～2017年まで実施）

富山湾をバックにビーチヨガを楽しんだ

富山湾ふれあいビーチフェスティバル

2016年7月30日
岩瀬浜海水浴場（富山県富山市）

国内外から選ばれる「富山湾」を目指すため、「景観」「賑わい」「情熱」を活かし、ビーチバレーボール大会、ビーチバレーボール教室や他のビーチレクリエーション、海浜清掃活動を実施。県民の「富山湾」の環境意識を高めることを目的に開催した。（2016年～2019年まで実施）

2016

記者会見を開催しプロジェクトの主旨を説明した

「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」発足

2014年

日本の資源を活かし「元気力・活性力・世界への発信力」につながるきっかけとして「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」を発足。ナビゲーターに浅尾美和氏らが就任し、アジアオリンピック評議会主催による「アジアビーチゲームズ」を招致するため、勉強会や大会視察を実施していった。

ナビゲーターを務めた浅尾美和氏と朝日氏

ODAIBAビーチスポーツフェスティバル

2014年5月3日～5日
お台場海浜公園おだいばビーチ（東京都港区）

ビーチ・マリン・ハイブリッドスポーツの国際大会の招致を目指す「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」が発進。日本の海辺に「ビーチ文化」形成を促す活動第1弾として「ODAIBAビーチスポーツフェスティバル」を開催。エキサイティングなプログームを披露し商業的要素を幅広くPRし、ビーチスポーツの関心をひき価値観を高めることに尽力した。※現在も継続中

2015

2014 プロジェクト発信

温暖な館山でビーチスポーツの魅力を発信

スポーツビーチin館山2012

2012年9月8日、9日
北条海岸（千葉県館山市）

ビーチスポーツイベントの開催場所としての環境が整っている館山市北条海岸を活用し、ビーチバレーボール、ビーチサッカーの大会を開催。地域の活性化や温暖で過ごしやすい館山エリアをスポーツの町として印象づけていくことを目的に行われた。

「ホワイトビーチ開き」として式典を行った

しらこばと水上公園「ホワイトビーチ」オープンイベント実施

2012年7月16日
県営しらこばと公園（埼玉県越谷市）

「海なし県」の埼玉に内陸では最大規模のホワイトビーチがオープン。プール内にビーチスポーツが楽しめるビーチコートが誕生した。オープニングイベントとしてビーチバレーボールのエキシビジョンマッチとスクール、ビーサン跳ばし大会を実施した。

葛西臨海公園の浜を舞台に開催された

ビーチライフin葛西

2012年9月8日
葛西臨海公園西なぎさ（東京都江戸川区）

葛西臨海公園の海辺通年活用プランとして、ビーチスポーツを社会実験イベントが企画された。地元市民を対象に海辺の活用における需要有無と楽しさを体感してもらうことを目的とし、今後のビーチスポーツ施設常設化の可能性を模索した。

2013 2012 新理事長のもとで

第19回ゲストの根木慎志氏

はだし文化推進啓発事業「健's BAR」

当時理事長だった朝日健太郎が、特別ゲストを招きトークセッションしながら、ご来店されたお客様と交流を深めるために企画された。ビーチ事業に興味を持ってもらい、『ビーチライフの輪』を広げていくことを目的に過去20回に渡って開催されてきた。※現在も継続中

新理事長に就任した朝日氏

朝日健太郎氏が新理事長に就任

2013年1月

発足当初から理事長を務めてきた瀬戸山正二氏の後を継ぎ、2012年にビーチバレーボールのプロ選手活動を引退した朝日健太郎氏が新理事長に就任。「日本をビーチから元気していく」をコンセプトにビーチスポーツだけではなく、ビーチカルチャーやビーチライフに通じるさまざまな企画を打ち出していった。

撮影したはだし写真はモザイクアートに使われた

はだし1000人なれるかな？「全国はだしキャラバン」

2013年　全国各地

人間を健康にさせ、思いやりの心を育ませ、人間回帰をさせる「はだし」の力。1人でも多くの人にビーチで「はだし」の魅力を知ってもらい、「はだし」写真でモザイクアートを作成。健康の向上、青少年育成を目的に行った。

柏崎在住の遊佐雅美からメダルを贈呈

ビーチライフin柏崎

2013年8月24日
柏崎中央海岸（新潟県柏崎市）

約42キロの海岸線があり、夏場は海水浴、冬場はマリンスポーツが盛んな柏崎。1年を通じて訪れてもらえる環境を作るために、「日本ビーチ文化振興協会柏崎準備会」を立ち上げた。「安心安全な柏崎の海」を目標に柏崎支部化に向けて活動をスタートし、その一環として「ビーチライフ in 柏崎」を開催した。（2013年～ 2017年まで実施）

親子で楽しめるコンテンツを導入した

親子対抗はだし運動会

2013年7月21日
お台場海浜公園おだいばビーチ（東京都港区）

はだしになれる環境として最適なビーチ。親子で時間を一緒に過ごし、楽しさを共有できる「親子運動会」を企画し、親子愛を深めることを目的として開催された。（2013年～ 2018年まで実施）

年齢層幅広い多くのランナーがビーチランを楽しんだ

貝塚二色の浜ビーチ&パークラン

2015年11月22日
二色の浜公園（大阪府貝塚市）

緑の松林と白い砂浜が美しい二色の浜。海水浴文化が衰退する中、通年活用できるビーチ、観光誘致資源となるよう新たなるブランディングのため、公園全体を使ったマラソン大会を実施。「健康になれるアクティブな街・貝塚」という新しいイメージを全国に訴求した。※現在も継続中

海の京都をビーチスポーツの街へとPR

ビーチスポーツフェスティバル in 京丹後

2015年7月18日、19日
夕日ヶ浦海岸（京都府京丹後市）

海水浴文化からビーチ文化へと花開く様、啓発活動として開催した。プログラムもビーチバレーボール、ビーチフラッグス、ビーチ相撲、スタンドアップパドル等、豊富。のんびり過ごす空間づくりとして海辺図書館を設置し、ビーチ活用の間口を広くし、海の京都「ビーチスポーツの街・京丹後」と全国へ発信した。（2015年～2016年まで実施）

杉並区にビーチコートが誕生し定期的にイベントを開催

オリンピアンと親子でビーチスポーツ体験

2015年5月30日
お台場海浜公園おだいばビーチ（東京都港区）

杉並区がビーチバレーボール・ビーチスポーツの中心地となることを願い、生まれた企画。「はだし文化」を体験することで継続的な青少年育成、日常とは違った開放的な自然環境の中での心身のバランス、健康づくりに役立てることを目的とし行っている。※現在も「はだしであそぼう！親子でビーチスポーツ体験！」として継続中

鹿嶋の活性化のために開催されたシンポジウム

海辺活用シンポジウム「元気な鹿嶋はビーチから」

2015年3月8日　大野ふれあいセンター
多目的ホール（鹿島市大字津賀）

津波による災害から恐怖心が先立ち、地元の方が海辺で集う機会が減ったことから、防災や水辺の正しい知識の理解促進を目的としたシンポジウムが開かれた。鹿嶋市の素晴らしい海岸の活用促進から地域の活性化へつなげていった。

2015